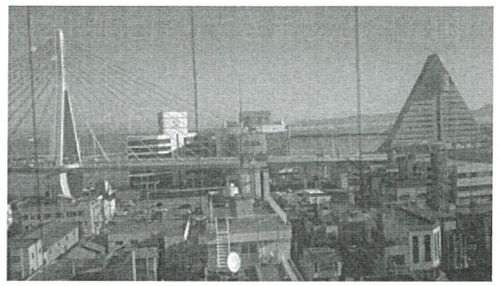
回覧

値小だより

島から日本一楽しい学校を
～子どもが未来に誇れる学校～

平成２８年１０月１９日　第１６号
校長　酒　井　元　治

インターナショナルはあいさつから！



先週、青森に出張に行ってきました。「全国へき地教育研究大会」という会で、私にあてがわれてどうしても行かなければならず、半ばしぶしぶでしたが行ってみてたいへん勉強になりました。「へき地」というからにはやはりそういう学校からの先生方がほとんどで、「うちは全校児童が 10 人です。(分校ではありません)」というような学校からみえられた全国の先生方でした。こうやってみると、当然のことなのですが、日本という国には小さな学校が多く、地方の津々浦々まで公教育が保障されていることがよくわかりました。出張の報告は町教委やうちの職員にするとして、夜に研修したことを報告させていただきます。

私は一人で他県の出張に行くことが多いので、夜は居酒屋を探して「ちょっと、いっぱい」です。だいたいはチェーン店などの店を避け、カウンターしかないような小さなお店を選んで入ることがよくあります。お店の方や常連さんとの会話を楽しみたいからです。「長崎から来たんだけど、地のものでおすすめありますか？」といった注文から始まります。職業は明かすことなくしばらく飲んでいるのですが、そのうち会話が弾んでくると素性を明かさざるを得なくなります。

お店の雰囲気によってお店の方を「大将」と言ったり「マスター」と呼んだりしていますが、京都では「ご主人」という呼び方が一般的というのもわかりました。

さて、今回もカウンターしかないようなお店を探してちょっと飲んできました。青森の夕暮れは早く、５時にはもう真っ暗になります。「津軽じょんがら節」「越冬つばめ」「津軽恋女」（これも保護者の方はご存じないかな…）が頭の中に聞こえながら、「これは飲むしかないな。」と６時くらいから店を探します。今回は３泊したのですが、３夜ともやっぱりそんな感じの店。３日目に行ったやはりカウンターしかないお寿司屋さんで、このお店のご主人と常連さんお一人に私、３人でしばらく相手をしていただきました。二人とも７０歳ほどのご先輩でしたが、まだまだお若くおしゃれな感じの紳士でした。また、二人とも博識でいろいろなことを教えていただきました。戦国時代からの歴史に始まり、青函連絡船で５時間かけて北海道に修学旅行に行っていたときの話になります。当時、北海道ではまだ米がとれず(寒冷地用の品種改良ができていなかったため)、先生は「明日の修学旅行、米を持って来いよ！」と声をかけていたそうです。この米をどうするか。宿泊する旅館にあげて宿泊代を安くしてもらっていたという話を聞きました。

また、この常連さん、今はビルの管理人をしているとおっしゃっていましたが、若い頃には世界各地を飛び回る商社マンだったとか。「すごいですね。」というと、

「外国なんてね、あいさつができればいいんだよ。あいさつができないとコミュニケーションができない。フランスなんて、本屋に入るにもあいさつからだよ。」
「どういうことですか？」と聞くと、
「ボンジュールって言って入らないと、こいつ何しに来たんだ？怪しいぞっていう目で見られる。ボンジュールって言うだけで最初のコミュニケーションがとれるんだ。あとは、身振り手振りでもどうにかなるよ。」
というお話。まあ、多少の脚色はあるにしても、なるほどと感心させられました。お国柄の違いはあるにしても、納得できる話です。

前にもこの値小だよりで書いたように、小値賀は「あいさつの島」です。本文は読んだことがないのですが、中学校の国語の教科書にも小値賀のあいさつの話が載っていたと聞いています。(「島で見たこと」著者　高田宏　氏)

この「あいさつの島」で育った子どもたちがどこに行ってもあいさつをきっかけにコミュニケーションをとれるよう育てていきたいものです。

というわけで、私の出張はかなりマイナス（出費の面で）、妻にはいつも嫌な顔をされています。

伝える内容は少ないのに、かなり引っ張ってしまいました。<(_ _)>

結果は自信に

以下は、前号お話ししたこの夏に初盆参りに行った恩師の話です。この文は、２学期始めにあたって私が職員に配布したものです。子どもたちの成長を私たちの仕事の結果とするために。

昨年末、恩師の訃報が飛び込んできた。中学校の英語教諭だった先生だ。生涯一教諭を貫いた。私の父（６８歳で亡くなったが）と同じ年生まれだったので、８３歳の生涯だった。もう１０年ほど前から自宅療養で奥様の看護、私たちの訪問も断られる状況だったので、「いよいよか…。」という思いだった。

先生のトレードマークはジャージに長靴。自宅に牛を飼っていて、朝の世話をしてから愛車スカイラインをこの格好で運転して通勤。身長は１６０ｃｍ、体重は５０ｋｇちょっと。小柄な体格のどこから出てくるのかというほどのバイタリティーだった。

１ヶ月に５日ほどの早朝補習。早朝７時半ぐらいだったろうか、英単語の１００問テスト。合格するまで繰り返し受けさせられた。先生が行かれる教室の黒板の上には２ｍほどの青竹が置いてあった。もちろん生徒を叩くため。よく頭にたんこぶができていたものだ。
（体罰を容認しているわけではありませんので。）

厳しかった。隣の席の子が質問に答えられないと「そばバチじゃあ！」とこっちまで叩かれる理不尽なこともあった。
（理不尽な指導を容認しているわけではありませんので。）

あるとき、先生は片足に大きなギブスをつけて学校に来た。ウグイスを飼っていて２階の軒下につるしていた鳥かごを取り込もうとして屋根から滑り落ちたとのことだった。しかし、後年奥様に伺ったところ、酔っ払ってトイレに行きたくなり、何を思ったか２階の屋根から小便をしようとして滑り落ちたというのが事実らしい。当時３階にあった私たちの教室まで１階の職員室からかわりばんこで負ぶっていったものだ。

破天荒だった。熱血だった。そして、何より温かだった。土曜日に残されてプリントの手伝いをすると、必ずうどんを食べに連れて行ってもらっていた。生徒ともよく話された。それぞれの家庭の様子もよくご存じだった。

いい加減に指導する同僚の先生が嫌いだった。授業に毎回遅れて来ては、世間話をする先生を名指ししながら、「おまえ達はあの先生に何を習っとる。５０分の授業に１５分遅れて、余計なことばかりしゃべって、時間をつぶしとる。」とよく言われていた。
（同僚批判を容認しているのではありませんので。）

片田舎の中学校はそれほどお利口さんの学校ではなかった。私が中学校１年の夏に新築された校舎。その３階窓から、代わる代わる一人の生徒の足首を何人かで掴み逆さにつるすという遊びが流行るような学校だ。

そんな学校の英語の成績だけは抜群によかった。業者の模擬テストを年数回受けさせられたが、当時、県ナンバー１だった長崎市近辺の某私立中・高一環教育学校の平均を抜き１番となった。同級生の入試は英語で稼いだ。高校に入って私たちの自信となった。

同級生のある者は一般向け英語教室の経営者になった。ある者は水産高校から大手水産業者に就職し、数年間の遠洋漁業を経て現在は長崎支社の所長となった。ある者は信販会社に就職し、途中海外留学、帰国後同じ会社で福岡支社の管理職となった。もちろん、成功した同級生ばかりではないが…。そして、できの悪かった私も教員になれた。先生のお陰だった。結果にこだわった先生だった。

先生がつけてくださった学力と根性と生き方は、私たちが人生を生きていく上での間違いのない力となった。人生の選択肢が増えた。夢を持つことができた。

我々は、小学校なりに結果にこだわるところでありたい。

実はこの先生のご次男が数年前まで小値賀中にいらっしゃったＮ先生であることを、初盆に行って知り、縁の不思議さ、ありがたさに驚いたところでした。

さて、本年度も折り返し地点を過ぎた今、子どもたちに結果を残せているのか振り返ってみたいところです。